39. 居住環境における緑被空間と認識度について

田 畑 貞 寿*

池 辺 このみ*

平 山 実*

Green Spaces and Degree of Cognition in Living Environment.

Sadatoshi TABATA, Konomi IKEBE, Minoru HIRAYAMA

摘要：居住環境を構成する緑被空間を、緑被空間自体がもっている存在効用と住民とのかかわり方などからとらえることは、今後居住環境向上のために重要である。この報告は、居住環境において認識されている緑被空間が、距離の増大によってどのような変化を示しているかを明らかにし、さらに、認識のされ方が緑被空間の内部構造に係わる要因によってどのように違うのかについて考察した。

1. はじめに

居住環境を構成する緑についての研究は、数多くなされている。特に70年代に入ってから、緑の量と住民の緑意識について定量的な研究がなされた。青木^{1) 2)}は、緑に係わる満足感を緑の量、個人属性や周辺環境に求め、緑の満足感を決定する要因として緑の多少感だけでなく疲労感や大気汚染、建物の混み過ぎ、子供の遊び場との関連をあげている。

浅川^{3) 4) 5)}は、住民の緑地意識を機能の認知、個人属性の相異、居住地の相異との関係でとらえ、居住地区における緑地満足度と緑地指標との関係を分析し、樹木地率の重要性、さらに他の緑被地率や建ぺい地率などを加味することを提言している。これらの研究は、平面的な緑のとらえ方で人間に対する心理的・精神的な機能や効果を説明してきたが、大森⁶⁾は、居住している人びとがどのようなものを緑として認識しているかを明らかにした。すなわち、都市に住む人びとは、庭の緑、住宅内から見える緑といった身近な緑を最も緑として認識していることをあげ、高木はど評価されている。

同様に、高橋・野田^{7) 8)}らは、緑を量的・質的にとらえようと試み、われわれの日常生活に係わる緑に着目した。そして、日常生活圏域の中での緑の分布と緑意識との関係を調査し、緑意識を支配する圏域、緑の心理的充足感を維持するために必要な緑被率の閾値、また、親しみをもって受け入れられている樹林・樹木の立地タイプを明らかにした。

近藤^{9) 10)}らは、緑地周辺地域の住民人口と緑地利用者数の比率が、緑地から距離が増大すると減少し、特定の

距離点で屈曲する傾向のあることを認め、この屈曲点の前後に緑地の誘致範囲があるのではないかとした。このような緑地の圏域についての研究は児童公園など住区基幹公園を中心にしたものであって、居住環境を構成する様々な緑被空間についての研究はあまりみられない。

居住環境を構成する緑被空間は、公的なもの、私的なもの、さらに地域のなかで存立する条件も様々であって、距離が遠くなれば誘致性も低くなる一般的傾向は経験的にも認められるが、すべてが同じ傾向を示すことには疑問が残る。近年、身近な緑について再認識する動きがでてきたが、緑被空間に係わる諸条件によって受け入れられる度合いに違いがあるのではないだろうか。本研究は、居住環境を構成する様々な緑被空間について、

- ① 身近な緑被空間として住民に認識されているものを明らかにし、
- ② その認識率の違いから緑被空間の性質について考察を加え、
- ③ 認識度と緑被空間に係わる諸条件を明らかにし、
- ④ これからの緑被空間の運営・管理についての知見をうることを

などを目的に実施した。

2. 緑被空間構造と認識度について

ここで取り扱う緑被空間とは、筆者(田畑)らがすでに研究し発表してきた緑被地のもつ都市生態的意味を考慮しながら、居住環境のなかで、単木や一団の樹草等の植物によって構成されている人工的空間をも含む三次元の空間を緑被空間と呼ぶことにした。

* 千葉大学園芸学部

次に、緑被空間の構造について述べる。緑被空間は、居住環境のなかで存在すること自体様々な機能や効果をもっている。また、地域とのかかわりも量的・質的な違いによって異なっている。たとえば、公園のように面積が広大で、土地の所有が公的機関の場合と、企業地のように面積が広くても地域住民とのかかわりの薄いものがある。さらに、雑木林を地主の厚意で開放しているものや、個人の敷地を保護樹林に指定して維持育成しているものなどがある。これらを大きく分けると、

- ①公有型…国有、都道府県有、市町村有のもの
- ②公益法人型…学校、病院、神社、寺院など
- ③企業法人型…会社保有のもの
- ④公有型…入会地等
- ⑤私有契約型…私有地ではあるが、保護樹林や生産緑地等に指定して助成を行なっているもの。
- ⑥私有型…個人所有のもの。

の6タイプに土地所有や管理主体が分かれる。また、緑被空間の性格も、

- ① 居住環境と関連しながらきわめて身近な生活に関係し、存在することによって価値をもつもの
- ② レクリエーション機能などに関係し、利用することによって価値をもつもの
- ③ 移動のための機能をもつもの
- ④ そこに住む人が日常的経験として視覚的にとらえているもの

などがあげられる。このように、居住環境における緑被空間は、単に量的側面だけでなく、所有・管理主体、利用主体や利用状況、地域社会とのかかわりなどの質的側面も把握することが必要である。本研究では、これらの質的側面を緑被空間の内部構造と定義し、存在する緑の質や形態と以上の内部構造を総称して緑被空間構造と呼ぶことにした。

さて、人びとが身近な緑として認識しているものはどのようなものなのか。そして、認識のされ方に違いがあるのは何が原因しているのか。おそらく、認識の度合は、緑の質や形態、また、その内部構造によって左右されると考えられる。本研究では、この仮説の妥当性をみるために、認識の程度とその変化から認識度を設定して考察を試みた。

3. 調査・分析の概要

調査データは、昭和57年7月から8月にかけて実施した「居住地の緑に関する意識調査」の部分に依ったものである。意識調査では、「身近にみられる緑」の認識の度合をみるために、歩いて5分以内のもの、10分以内のもの、それ以上のものの3つに分けて記述を求め、さらに地図上に記入してもらう方法をとった。アンケートの対象地区は、東京都杉並区清水町・世田谷区成城町・東

久留米市南沢町の3地区である。配布数・回収数について

表一 アンケート対象地区

地区名	配布数	回収数	回収率
杉並区清水町	300	184	61.3 ⁽⁹⁾
世田谷区成城町	300	200	66.7
東久留米市南沢町	300	218	72.7

ては表一 アンケート対象地区に示した。

抽出された緑被空間については現地踏査を行なって、緑被状況、利用状況、土地所有、管理主体、地域社会との関係を明らかにした。

分析の方法は、抽出された緑被空間を中心にして5分圏・10分圏・それ以上の圏域に分け、(この場合、歩いて1分ということを距離80メートルに換算して距離的圏域を決めた。)アンケート対象者の答えた位置が抽出した緑の圏域と違っているときは、正確な圏域に入るよう修正を加えた。ここで取り上げる認識率とは、抽出された緑被空間を中心にしてどのくらいの人が身近な緑として認識しているのか、その出現頻度を圏域ごとのアンケート回収率で割った率とし、抽出された緑被空間を中心にして5分・10分・それ以上の圏域ごとに認識率を求めた。

さらに、居住環境のなかで「身近な」という距離は歩いて楽に行ける5分以内であるから、5分圏の認識率を基本にして圏域による認識率の変化率を求め、圏域が広がるにつれて認識の程度がどのような下がり方をするのかを検証した。

4. 結果及び考察

1) 抽出された緑被空間

「身近にみられる緑」の問に対する抽出箇所数を立地別に示すと、表一 地区別に抽出された緑被空間の種類を表のようにまとめることができた。これにより地区ごとの特徴をみると、清水では個人宅一公園、成城では街路一個人宅、南沢では農地一団地一個人宅の順になっている。3地区で共通にいえることは、どれも個人宅が上位にあることである。このことは、個人の生垣や庭木もそのまの緑として認識されているということができる。さらに、居住時期の古い地区ほど構成比が高くなる傾向を示している。個人宅を抽出した人のほとんどが、個人名をあげていることから地域に対する親しみやすさがうかがわれる。

また、「身近にみられる緑」のもう一つの特徴は、地域のシンボルの存在である。清水では妙正寺公園が緑の核として存在しているし、成城では、住宅地内には珍しく桜の大き木が並木をつくっている。南沢は、都内でも比

表－2 地区別抽出緑被空間の種類

立地 地区名	公 共 的 空 間				準 公 共 的 空 間			開 放 型 空 間			閉鎖型空間				
	公 園	学 校	付 属 園 地	街 路	神 社	寺 院	団 地	水 辺	農 地	斜 面 緑 地 雑 木 林	企業地	個人宅	町内の 生 垣	その他	抽 出 箇所数
清 水	244 (26.0)	108 (11.5)	42 (4.9)	12 (1.2)	67 (7.2)	86 (9.2)	0 (0)	8 (0.9)	31 (3.3)	7 (0.7)	3 (0.3)	298 (31.3)	4 (0.4)	29 (3.1)	937 (100.0)
成 城	44 (4.4)	99 (9.8)	7 (0.7)	248 (23.9)	20 (2.0)	35 (3.5)	10 (1.0)	29 (2.9)	51 (5.1)	88 (8.7)	54 (5.4)	199 (20.0)	95 (9.7)	29 (2.9)	1008 (100.0)
南 沢	86 (7.9)	125 (11.5)	0 (0)	8 (0.7)	77 (7.1)	50 (4.6)	147 (13.6)	33 (3.0)	153 (14.1)	79 (7.3)	51 (4.7)	147 (13.6)	101 (9.2)	29 (2.7)	1086 (100.0)

緑地地区の指定をうけている。

以上のことから、「身近にみられる緑」として認識されている緑は、庭の緑や生垣のように日常的経験として視覚的にとらえられているものや、古くからその地域に親しみをもたれているもの、また、季節的な変化に富み住民自身も落葉掃きなどの管理ができるものであると言える。

2) 認識率の違いからみた緑被空間

ここでは、認識率の高いもの（認識率50%以上）・中程度のもの（認識率20～50%）・低いもの（認識率20%未満）の3つに分けて、その緑被状態と内部構造について述べる。

認識率の高い緑被空間は、清水地区では妙正寺公園・妙正寺、成城地区ではサクラ並木・イチョウ並木・観音堂、南沢地区ではひばりが丘団地・竹林公園・氷川神社・自由学園・給水場付近の雑木林などであった。これらの緑被空間の状況はすべて高木が優先し、下草も刈られていて立入りも自由である。土地所有をみると、公有・公益法人有・私有でも緑地保護区等に指定されているものがあり、公共的緑被空間の性格が強い。

認識率が中程度の緑被空間は、清水地区では敷地面積の大きな地主の屋敷林・幼稚園（私立）・小学校（公立）、成城地区では私立大学・個人の雑木林、南沢地区では一団を形成している住宅地の庭木や生垣・ゴルフ場・寺院であった。緑被状況は、高木林が全面的に存在しているもの他、部分的に高木があってランドマークになっているものが多いようである。また、利用状況では、立入り自由である空間よりも、一定の制限が加わっているなかで利用するもの、また、一時期に住宅と密接な関係をもつ等の性格が強い。い。

認識率の低い緑被空間は、清水地区では保護樹木に指定されている大木・季節的な変化に富む庭木、成城地区では川等の水辺地・畑・独立木、南沢地区では企業所有のグラウンド・農家の屋敷林・畑・樹苗園であった。緑

被状況は、ランドマーク性の強い独立木が優先し部分的なものである。土地所有は、企業法人有や私有がほとんどで立入って利用できるものは少ない。特に、企業所有のグラウンドは大面積でありながら、市民とのかかわりがないために認識率が低くなっていると考えられる。

3) 認識度を左右させる要因

5分圏域を基本にして圏域が広がるとどのように認識の程度が変化するかをみると、認識されている緑被空間を大きく4つのタイプに分けることができた。

- I 認識が高く、圏域による変化がみられないもの
- II 認識が高く、圏域による変化が急激なもの。
- III 認識が中程度で、圏域による変化がみられないもの。

IV 認識が中程度で、圏域による変化が急激なもの。
これらのうち、I・IIタイプについて圏域と認識率及び変化率について示すと、図－1 Iタイプの緑被空間と認識率、図－2 IIタイプの緑被空間と認識率、図－3 Iタイプの認識率の変化、図－4 IIタイプの認識率の変化のようになる。

Iタイプの緑被空間は、妙正寺公園(I₁)・妙正寺(I₂)（清水地区）、サクラ並木(I₃)・イチョウ並木(I₄)（成城地区）であった。これらは、どちらの地区においても古くから地域に根づいているものであって、地域のシンボル性が非常に高い。また、地域住民も日常的に接することができ、年中行事が催されたり、維持や管理の面でも住民ができる範囲の事を行なえる緑被空間と言える。

IIタイプの緑被空間は、観音堂(II₁)（成城地区）、竹林公園(II₂)・氷川神社(II₃)・第1給水場東の雑木林(II₄)・自由学園(II₅)・ひばり丘団地(II₆)（南沢地区）であった。緑被状況は高木が優先して、自由学園を除けば立入りはいつでも自由である。認識の度合が急激に下がる理由としては、その場所の利用頻度や目的、地域の中での社会的な結びつきにあるのではないかと考えられる。

IIIタイプの緑被空間は、公立小学校・私立幼稚園・地

図-1 Iタイプの緑被空間と認識率

図-2 IIタイプの緑被空間と認識率

図-3 Iタイプの認識率の変化

図-4 IIタイプの認識率の変化

表—3 緑被空間の認識度と内部構造

認識度	名 称	規模 (㎡)	緑 被 状 況			利 用 状 況		立 地 地 形	ランド マーク 性	地 域 社 会 との 関 係	制度・契約	土 地 所 有	管 理 主 体
			樹 高	樹 種	状 態	利 用 者	利用形態						
1	妙正寺公園	7940	高 木		下草なし	一般市民	レク利用 立入自由		○	公 園 公園指導員		杉 並 区	杉 並 区
	サクラ並木		亜高木	サ ク ラ		一般市民	通 行		○			世 田 谷 区	世 田 谷 区
2	観 音 堂	2000	高 木	スダジイ コナラ	下草なし	一般市民	立入自由		○	年 中 行 事	保 存 樹 林		
	竹 林 公 園	10000	高 木	タ ケ	枯 葉	一般市民	立入自由			公 園		東久留米市	東久留米市
	水 川 神 社	2250	高 木	ケヤキ シラカシ	周 囲	一般市民	立入自由			年 中 行 事		水 川 神 社	水 川 神 社
	第1給水場 裏の雑木林	7080	高 木	ス ギ	二 次 林 草	一般市民	立入自由	傾斜地 湧 水			緑地保護区	個 人	東久留米市
3	沓掛小学校	12160	高 木	アカマツ シラカシ サ ク ラ	部 分	一般市民	スポーツ 敷 策			小 学 校	学 校 開 放	杉 並 区	杉 並 区
	裕和幼稚園	2160	高 木	ケヤキ カ	部 分 下草なし	幼 稚 園 者	立入不可		○	幼 稚 園	保 護 樹 林	個 人	個 人
	成城学園大学	76700	高 木	クロマツ	部 分	大 関 学 者	立入不可					法 人	法 人
4	井口長太氏宅	1970	高 木	ケヤキ シラカシ			立入不可		○	地 主	保 護 樹 林	個 人	個 人
	ゴルフ場	13960	亜高木	サワラ クロマツ 芝	部 分		立入不可					企 業	企 業
	栗原造園	21420	低 木	雑 木 樹 苗			立 入 可				生 産 緑 地	個 人	個 人

主の厚意によって開放されている雑木林（清水地区）、私立大学（成城地区）である。このタイプは、子供の成長過程で一時期に密接なかかわりをもつことが特徴としてあげられる。

IVタイプの緑被空間は、傾斜地に残された部分的な雑木林や財団法人の敷地（成城地区）、企業所有のゴルフ場・農家の屋敷林・樹苗等（南沢地区）、立入ることにはかなり制限が加わり、外側から眺めることができる程度にとどまっている。

以上の認識の程度と変化率から4つのタイプを認識度1, 2, 3, 4と設定して、緑被空間に係わる他の諸条件を整理すると、表—3 緑被空間の認識度と内部構造のようになる。この表によれば、規模はまちまちであるが利用状況が開放的なものから次第に制限が加わっているのがわかる。また、土地所有や管理主体も公共から法人個人・企業へと変わってきている。したがって、緑被空間の認識度は、距離のみに規定されているのではなく、緑被空間とのかかわり方の違いに大きく影響を受けられると考えられる。

5. おわりに

今回の報告では、身近な緑として認識されているものが単に質や形態だけでなく、その緑被空間に係わる様々な要因によって左右されていることがわかった。居住環境を構成する緑被空間はいろいろな存在形態があるが、それをどのように係わりで維持・育成していくのかを考えることは、居住環境の向上に役立つことと思う。今回

は、何故その緑が選ばれたのかという原因が明らかにされていないので、今後、調査や検討を加えていきたい。

引 用 ・ 参 考 文 献

- 1) 青木陽二（1973）：住民意識からみた自然環境に関する研究：都市計画学会学術研究発表会論文集 8 P 19～24
- 2) 青木陽二（1975）：居住環境として求められる緑量の測定方法に関する研究：都市計画学会学術研究発表会論文集 10 P 163～168
- 3) 浅川昭一郎（1976）：札幌市における住民の緑地意識 I）：造園雑誌 39(4) P 3～5
- 4) 浅川昭一郎（1976）：同(Ⅱ)：同 40(1) P 18～28
- 5) 浅川昭一郎（1977）：同(Ⅲ)：同 41(1) P 3～10
- 6) 大森 基（1976）：緑の量的指標について（その1）：都市計画学会学術研究発表会論文集 11 P 367～372
- 7) 高橋理喜男・野田敏秀（1975）：都市環境における快適性の指標としての緑の量的質的基準化に関する研究：造園雑誌 39(1) P 12～19
- 8) 野田敏秀（1975）：日常生活圏における緑と住民の意識との関係：都市問題研究 27(8) P 93～117
- 9) 近藤公夫（1965）：都市緑地の利用実態に見られる都市地域構成とそれから結論される緑地系統計画の考察—都市公園の利用に関する研究4)—：造園雑誌 29(1) P 8～13
- 10) 近藤公夫・福井美智子・宮森隆子（1968）：都市第

Summary : There are many studies on green spaces in living environment. These studies said about relations between green spaces and sense of dwellers. What green spaces do dwellers recognize as intimate ones? The object of this report is to grasp relations between a inner green space and dweller's recognition through the degree of knowledge on intimate green spaces. Perhaps differences of recognition of the green spaces would be the causes of the conditions, the forms and the inner structure. Results were the following.

1) Intimate green spaces

These are usually seen in daily life.

These have been in the region for a long time.

These have changes in every season and dwellers can maintain for themselves such as cleaning fallen leaves.

2) Green spaces differing to degree of their recognition

High degree—There are a lot of high trees in the green

(50%~) space and we are free of these spaces.

Medium degree—There are many high trees in the green space

(20~50%) and we make use of it with some restrictions.

Low degree—There are symbol trees (landmark) and the

(~20%) and owner is enterprise corporation and private.

3) Dominant causes of the difference of their recognition Recognition of green spaces is related to landmark, contacts in dweller's daily life and ways of maintenance and management.